

4月から野田中学校に勤務するようになり、この「校長室だより～燦燦～」は、梁川高校から野田中学校へと引っ越しをした。野田中学校には、4月からのNo.334以降の分しかない。No.1からNo.333はというと、「校長室だより 燦燦」で検索すると出てくる。4月からの新たな読者の一人に、そう教えてもらった。その人は、No.1からNo.333まで読んだそうである。

ありがたいことに、いろいろな方から「校長室だより～燦燦～」のお話をうかがうことがある。「あの〇〇の話は～」とか「〇〇はいいですね」などとコメントをいただける。ラインやメールをいただくこともある。「よく毎日書けますね」「毎日書くことがあるんですか」と言われることは多い。そんなときは「心が動けば書くようにしています」と答えている。

昔は、歳を取ると感動しなくなると勝手に思っていた。だが、私に関していえば、それは違っていた。涙もろいというのか、すぐに泣くようになってきた。若い頃よりも感動するようになってきた。あるいは、昔は感動していても、感情が表出していなかったのかもしれない。それが、今は自然に出るようになった。なぜだかはわからない。

折に触れて、松下幸之助の本を読んだり、名言をメモしたりすることがある。先日も、次の名言に出合った。

感動のない経験を何十回何百回重ねても、価値ある経験とはいえない。

感受性の乏しい、感動もしない先輩よりも、感受性豊かな、感動する若者の経験のほうが、かえって経験としては価値があり、優れている。

中学校という職場には、幸いにも、感受性豊かな、感動する若者がたくさんいる。中学生の経験には価値がある。そんな中学生に囲まれて、感受性の乏しい、感動もしない先輩にならないですんでいるとしたら、幸せなことである。

心が動くためには、人と会うことや本と出会うことが必要である。旅にも出なければならない。そして、考えなければいけない。見方も鍛えなければならない。視点をもつことも必要となる。感性が鈍ってはいけない。自分を常にニュートラルな状態にしておかなければならない。

毎日書くことは、考えることであり、生きるための修行である。書いていないと、何かだめになりそうな恐怖に似たようなものがある。4月から本日まで、感動の連続であったというのは大げさであるが、日々、心が動いたことは事実である。そんな生活ができたことに感謝したい。

2022年、令和4年も心が動くかどうかはわからない。だが、心が動くように、少しでも感動できるように行動していきたいと思う。